

◆都倉新文化庁長官 就任インタビュー 日本の文化・エンタメを「産業」に発展させたい

第23代文化庁長官に就任した作曲家の都倉俊一氏（72）が4月16日、報道陣のインタビューに応じ、就任の抱負や来年度を予定している文化庁の京都移転等について語った。

都倉長官はこれまで、ピンクレディーの「ベッツバー警部」「UFO」のほか、山本リンダの「どうにもとまらない」など数々のヒット曲を手掛け、日本レコード大賞などの多くの賞を受賞。また、日本作曲家協会理事、日本作曲家協会常務理事、文化審議会委員などを歴任し、2010年10月から2016年3月までは日本音楽著作権協会（JASRAC）会長も務めた。

都倉長官は「コロナ禍で今困窮のド真ん中にある文化芸術関係者、アーティストに国からの支援が行き渡るようにしなければならぬ。また、将来的には日本の貴重な文化財やエンターテインメントを『産業』として発展させていく、そんな夢、目標を持ってきている。ポストコロナにたどり着いた際には、そうした前向きな努力に労力を傾注していきたい」と抱負を語った。

◆

第6期科学技術・イノベーション基本計画が策定された。芸術と科学技術の融合で、どのような新たな価値を生み出せるか。都倉長官「科学技術の発展で一番影響を受けた産業は音楽産業だ。デジタル音源など、今後は5Gの時代でもっと普及するだろう。音楽をはじめとした芸術文化が（広く、早く）伝わるようになったことは、作り手としてこんなに嬉しいことはない。



文部科学省記者クラブ加盟社および準加盟社等の合同インタビューに応じる都倉文化庁長官

一方、科学技術をエンタメの道具として今後も取り入れていくと思うが、人間の心や感情といった文化芸術の原点にあるものが人間が持っている芸術感覚は今の科学技術ではどうしようもないだろうと思っている。思っているというよりも信じている」

今年7月、ユネスコで『北海道・北東北の縄文遺跡群』が世界文化遺産登録に向けて審査される。登録に向けた期待と、登録された場合の保存と活用へのバランスについて、都倉長官「『縄文遺跡群』は日本の遺産というより、人間社会の営みの原点みたいなものだ。人類にとっても貴重な文化遺産だと思う。インバウンドという意味でも、日本は文化国家として付加価値で勝負していかねばならない。幸い、我が国には貴重な文化遺産があるが、『北海道・北東北の縄文遺跡群』は世界から認められる価値が十分ある」

2022年度中に文化庁が京都に移転される。改めて京都移転の意義とは。

都倉長官「京都は、日本の伝統文化の中心であることは間違いない。文化庁が京都に移転することで、無形なもの、有形なものも含めた京都の価値を改めて確認するという意義があるのではないかと。どんな不便なことや便利なところがあるのかまだ分からないが、正直なところ、楽しみにしている。若い頃、京都へはよく行っていた。東映の撮影所で映画音楽を担当させてもらった。祇園に連れて行ってもらったり。私は江戸っ子だが、京都を仰ぎ見るところがある（笑）。京都の皆さんからはいろんなことを学ばせて頂けるのではないかと」

これまでの文化行政では、伝統文化への支援がメインで、ポップカルチャーへの支援は疎かだったのでは。

都倉長官「まず、日本全体の文化予算の少なさがある。その中で、『重要文化財にほんだのお金が行って、ポップカルチャーになかなかお金が回らない』という議論は昔からあった。文化庁は戦後、日本が荒廃した時、日本の重要文化財を守って、修復して、保存する目的でできた役所だ。ただ、コロナ禍の予算を見ると様変わりした。けがの功名というか、コロナ関連の補助金として2700億円を付けた。文化庁予算の約2.5倍だ。今後は、伝統芸能だけではなく、ポップカルチャーまで幅広い日本の芸術活動に対する補助が出てくる。これは間違いない」